



自然科学書協会 会報

NSPA JAPAN



THE NATURAL SCIENCE PUBLISHERS' ASSOCIATION OF JAPAN

2024年10月8日 No.4
(通算109号)

目次

1. 第74期 第2回研修会 報告(研修委員会)	2
2. 自然科学の時間：災害対応と近現代史	4
(佐藤 慶一：専修大学 教授)	
3. 会員社訪問 社長インタビュー(朝倉書店 社長 朝倉 誠造)	8
4. 会員社訪問 社長インタビュー(養賢堂 社長 及川 雅司)	10
5. 東京都印刷工業組合主催研修会 報告(広報委員会)	12
6. 事務局だより	13
7. 編集後記	14



発行人：池田 和博 / 編集：広報委員会
一般社団法人 自然科学書協会

<https://www.nspa.or.jp/>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-101 神保町 101 ビル 3階

TEL：03-5577-6301

◆ 1. 第 74 期 第 2 回研修会 報告 ◆

2024 年 7 月 30 日（火）15 時 30 分から 17 時まで、文化産業信用組合本店 3 階会議室にて、（一社）出版梓会との合同研修会を開催しました。研修会には両会会員社より計 30 名様にご参加いただきました。

今回の研修では、長年にわたるコンサルタント事業で実績を誇る（株）青山財産ネットワークスより、第二事業本部リーダーの平野雄太氏をお迎えし、「出版社経営者必見—失敗から学ぶ円滑な事業継承」と題して講演いただきました。平野氏は長年にわたり主にオーナー経営者向けの相続・事業継承コンサルティング事業に従事なさっておられます。今回の研修では、事業継承の失敗例から考える円滑な事業継承についての講演を頂戴した後、聴講者からの質問に 30 分程度お答えいただきました。



平野雄太講師

まず、講演に先立ち、（株）青山財産ネットワークスについて、前身である（株）船井財産ドックが 1991 年に設立されてから上場を経て現在に至るまでの企業沿革と業績についてご紹介がありました。その後、出版業界に関する統計データから、業界をとりまく市場構造の変化、出版社の事業内容の変質について俯瞰した後、他業種を上回る深刻な後継者不在率、自社株式の継承負担の高止まりなど、出版業界における事業継承の足を引っ張る具体的な課題の数々についてご指摘がありました。

次に、事業継承を検討する際の選択肢や検討順序を踏まえた方向性を見定め方、それに向けての留意点を含めた、いわば事業継承の概説ともいえるお話をしていただきました。事業継承問題は早期の取り組みが有効であることは自明の理ですが、とかく後回しにされがちなのは、検討課題が多岐にわたり、どこから着手し何をどう検討すべきか、信頼できる指針が得難いことが要因の一つかと思われます。この概説に相当するお話は、事前に配られた資料内のフローチャートをたどりつつ進められましたので、自身に抜け落ちている検討課題や方向性が明確になりました。もちろん、企業ごとに事情は異なるとはいえ、いずれの課題であっても時間をかけて解きほぐしていくことの重要性も伝わる内容でした。

そして、本研修の主要演目である、具体的な事業継承の失敗事例の解説がございました。提示

された事例2件には出版関連事業の事業継承事例を取り上げていただきました。これらはどちらも、経営者・親族・従業員・取引先など利害関係者のそれぞれの思惑が絡み合う中、往年の橋田壽賀子女史の描くドラマのような相続問題までもが持ち上がるという、昨今では珍しくない類のものでしたが、事業の持続性・成長性への甘い見極めや、一部親族あるいは従業員への配慮の欠如、まさかへの備えの不足、または不十分な知識を過信して臨んだ結果の大幅なキャッシュアウトなどの躓きにより苦境に至るという失敗事例でした。これら失敗の要因について詳説の後、「もしもこうしていれば」と、別の事業継承プランを選択した場合を想定し、最善の着地点の提示がありました。利害関係者がそれぞれ納得できる未来へと、円滑に事業継承していくためには、客観的な分析力、リスクに備える想像力、税務・不動産などに関する専門的な知識や情報が不可欠で、くわえて十分な準備期間が必要であることを痛感させられる内容でした。^{かんせい}陥穽へはまってしまうケースの共通要因は、無知と嫉妬から生じているという講師の指摘は大変に示唆に富んだものでした。

研修会終了後、講師から講演内容に関するアンケートへの協力要請があり、ご協力をいただいた方には、事業継承に関する事例集『事業継承一親の心子知らず 子の心親知らず』（青山財産ネットワークス編著／B6判・192ページ）をご提供いただきました。アンケートの集計結果については、継続した勉強会開催や第二弾の研修会開催を希望する声が寄せられるなど、概ねご好評をいただけたようであると講師よりご協力への御礼と共にご報告を頂戴しております。当日ご清聴いただいた参加者の皆様に感謝申し上げます。

(研修委員長 片岡 一成：恒星社厚生閣)



会場風景

◆ 2. 自然科学の時間 ◆

「災害対応と近現代史」

まとう けいいち
佐藤 慶一

(専修大学 ネットワーク情報学部 教授)

1. はじめに

私は、政策科学や都市防災、データサイエンスなどを教えてきた情報学部^に所属する大学教員です。2021年から22年にかけて在外研究の機会に恵まれ、ハーバード大学ライシャワー日本研究所に滞在しました。入居させていただいたアパートの前のブラットル・ストリートには、ジョージ・ワシントンも住んでいたというロングフェロー邸をはじめとした歴史的な邸宅が立ち並び、歩き回ると、ずいぶんと昔の時代にタイムスリップしたような気持ちになりました。アパートから研究所があるオフィスまでは、旧ラドクリフ・カレッジの美しい建物と芝生を抜け、1720年に建てられたマサチューセッツ・ホール、巨大なワイドナー図書館、ル・コルビジェが設計したカーペンター視覚芸術センターなどを眺めながらの道のりでした。ハーバード像があるユニバーシティ・ホールには、ウクライナの国旗が掲げられていることがありました。長い歴史と現在の時間が連続して繋がっていることを自然に感じられる場所でした。



マサチューセッツ・ホール

大学院時代の指導教官がまとめたテキストを見直し、新しい本を作成しようと考えての渡米でしたが、ボストンの街を歩き回りつつ、自由に勉強を進めているうちに、当初の問題意識や自分の研究領域を逸脱し、災害対応と近現代史について考えるようになりました。日本での日常に戻

り、なんと大それた挑戦をはじめてしまったのかと怖れ多い気持ちになるのですが、東京から離れて自由に勉強できたアメリカの日々を懐かしく思い出しつつ、最近取り組んでいる研究について紹介させていただければと思います。

2. 近現代史と防災学の関係

アメリカ滞在中にホストを務めていただいたアンドルー・ゴードン先生は、ハーバード大学の歴史学教授で、日本近現代史の研究者です。大学では、先生の授業「Rise and Fall of Postwar Japan」を聴講させていただきました。歴史好きだった少年時代を思い出しつつ、様々なお話やディスカッションに強い興味を抱き、特に第2次世界大戦前後の日本についてあらためて（はじめて？）自分なりに考える機会となりました。



ハーバード大学の日本近現代史の授業の様子

ゴードン先生は、日本の近現代史について、『A Modern History of Japan』を刊行し、版を重ねておられ、日本語訳『日本の200年』も刊行されています。2021年に人間文化研究機構より日本研究国際賞を受賞された際、「歴史の魅力・歴史学の責任」と題したスピーチをされました。その中で、「ちょうど『日本の200年』の第3版を準備し始めた段階で、東日本大震災が発生した。私の歴史認識の中で災害に対する認識が欠けていた。より深く、新しく考えなければならないが、その考え直しはまだ進行中である」と、近現代史における災害の扱いに言及されていました。

それまで日本の講義で利用してきた『都市防災学』と、ゴードン先生の『日本の200年』および聴講した「Rise and Fall of Postwar Japan」には、埋めがたい距離感がありました。『都市防災学』には、都市防災に関連する様々な情報が、その歴史も含めて体系的に記述されていますが、『日本の200年』と関連するところはほぼありません。『日本の200年』には、日本の近現代の歴史が体系的にまとめられており、関東大震災や阪神・淡路大震災、そして東日本大震災について若干の記述がありますが、『都市防災学』で書かれているような防災についての記述はほとんど見られません。

この間、長きにわたり、災害や防災に携わる様々な取り組みが重ねられてきました。一方で、現時点でも、備蓄や避難など備えが不十分であること、アメリカやイタリアにあるような防災庁

がないことなど、課題も少なくありません。取り組みをよりよく進めるためには、一度立ち止まって、災害や防災の歴史や一般的な歴史記述との関係を調べたり考えたりしてみることも何かの役に立つのではないかと考えるようになりました。

3. 災害対応と近現代史の交錯

私は情報学者であり、これまで歴史研究をしてきた訳ではありません。したがって、1次資料に基づく詳細な歴史研究を展開するというより、すでに刊行された歴史関係の文献などを紐解く2次的な作業を行っています。扱う災害や危機も可能な限り広げることにして、微細な史実に捉われず、大枠を掴むことに主眼を置いています。

ある災害の被害や対応は、災害前の社会状況や構造と直接関係するものですし、災害後の社会状況や構造へとつながっていくものです。ある災害への対応の前後や最中に、他のイベントも起こりえます。東日本大震災であれば、その前のリーマンショック、民主党政権の誕生と瓦解、その後の自民党の復権と長期政権化、長期化する経済停滞など、次々と挙げることができます。

在外研究中は、中世ペスト、ロンドン大火、リスボン地震、関東大震災、太平洋戦争、戦後の災害などを取り上げながら、それらの災害の前はどのような社会であったのか、災害の被害や対応はどのようなものであったのか、そして、その後の社会の推移を描いていき、災害と社会状況・構造の関係性について考察を行いました。それから、インターネット検索、日米の新聞記事、日米の専門家へのインタビュー、思想や映像作品などとの関連から、東日本大震災の社会的影響や、災害の意味や歴史との関係を考えました。日本災害デジタルアーカイブを利用したり、質的データ分析のソフトウェアを使ったりしながら、それらの作業を重ね、『災害対応と近現代史の交錯』という書籍にまとめました。

少し脱線しますが、たまたま現地で講演を聞いたハーバード大学のアーサー・ブルックス教授の『From Strength to Strength』という書籍には、成功中毒により陥りがちな孤独から、人間関係を基にした幸福な人生へと「移行」すること、自分の弱さと向き合うことがそのきっかけとなることが書かれていました。それは、戦後の高度経済成長、諸外国との交流に学びつつよりよい社会のあり方を模索していくこと、災害や危機との向き合い方などと読み替えることができるかもしれないと考えたりしています。

4. プロテチオーネ・シビーレについて

東日本大震災後、キッチンカーによる温かい食事や、テントと簡易ベッドなどが標準的なイタリアの災害対応が、日本の粗末な災害食や避難所での雑魚寝などと比べて進んでいると話題にのぼることがあります。プロテチオーネ・シビーレとは、イタリア国家市民保護局と訳すことができる国の防災機関の名称です。2019年冬、同局の閣僚会議議長であった Giuseppe Coduto 氏に直接インタビューする機会がありました。イタリアの防災には、「市民生活や地域社会、歴史的建造物やまちの雰囲気までを含めた地域文化を保障する」という基本的理念があり、災害対応はそのための手段である、というように説明され、2016年のイタリア中部地震からの復興過程を紹介してくれました。キッチンカーやテントと簡易ベッド、ゆとりのある間取りに生活施設が整えられた仮設住宅、旧市街地を修復して再現するといった個別の対応方法の違いにも驚かされましたが、そもそも災害対応の目的とは何か、生命を守ることに加えて、市民生活や地域社会を守るという視点をどう捉えていくか、根源的な問いを投げかけられたように感じました。

2024 年夏、プロテチオーネ・シビーレを再訪してきました。さらに、シチリア島やナポリへ足を延ばしました。シチリア島西部では、1968 年のベリーチェ地震で被災した町が捨てられ、近代的な住宅地が造成されましたが、訪ねてみると寂れた様子でした。ナポリでは、1980 年のイルピニア地震後に建設された大規模な災害公営住宅団地を訪ねましたが、一部が不法占拠されたり、治安が悪化したりしている様子に驚かされました。イタリアは日本と同様に災害多発国であり、これまでも様々な被害や対応の蓄積のうえに現在があります。いずれ、その歴史を紐解いていき、なぜプロテチオーネ・シビーレができて、どのように現在の姿となったのかを探ってみたいと考えています。



ナポリ郊外の災害公営住宅

参考文献

- ・アンドルー・ゴードン (2013) 『日本の 200 年 (上) (下)』 みすず書房
- ・梶秀樹・塚越功編 (2012) 『改訂版 都市防災学』 学芸出版
- ・佐藤慶一 (2024) 『災害対応と近現代史の交錯ーデジタルアーカイブと質的データ分析の活用ー』 共立出版
- ・Arthur Brooks (2022) 『From Strength to Strength: Finding Success, Happiness, and Deep Purpose in the Second Half of Life』 Portfolio

執筆者略歴



1978 年生まれ。
 1979 年から 1981 年までイタリア・ローマで過ごす。
 2001 年 3 月 慶應義塾大学環境情報学部卒業
 2006 年 3 月 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程修了
 2006 年 4 月 東京工業大学都市地震工学研究センター研究員
 2008 年 4 月 東京大学社会科学研究所助教
 2013 年 4 月 専修大学ネットワーク情報学部准教授
 2019 年 4 月 専修大学ネットワーク情報学部教授
 現在に至る
 2021 年 9 月～ ハーバード大学ライシャワー日本研究所
 2022 年 8 月 客員研究員

◆ 3. 会員社訪問 社長インタビュー (No.13) ◆

● 社長紹介 ●

あさくら せいぞう
朝倉 誠造

(当協会における現職：理事 (2003 (平成 15) 年～))

● 訪問社情報 ●

【社名】株式会社 朝倉書店 (Asakura Publishing Co., Ltd.)

【創立】1929 年 (昭和 4 年) 11 月 6 日

【HP】<https://www.asakura.co.jp/>

【主な出版分野】科学一般、数学、物理学、化学、天文学・地学、電気・電子工学、機械工学、土木・建築工学、農学、医学・薬学、人文・社会科学、生活科学、他

■ テーマ 1 「株式会社 朝倉書店について」

一 御社の沿革などをお聞かせください。

1929 (昭和 4) 年に私の祖父朝倉鑛造が神田神保町に賢文館という出版社を創業し、主に教育書および農業書を刊行しました。1944 年に社名を現在の朝倉書店と改組して、戦後の日本の発展のためには自然科学の振興こそが必要だと考え、従来のジャンルだけでなく理学・工学および医学・生活科学など幅広い分野を手がけるようになりました。また、教科書や専門書だけでなく百科事典・辞典をも刊行していることが小社の大きな特徴かと思っております。その姿勢は現在も私たちの大きな指針となっており、今後も継承・発展させていくつもりです。

なお、弊社のロゴマークは科学・技術の発展を目指すという、植物のヒコバエを表現しております。

一 会社の雰囲気をごどのように感じていますか？

社員が関心の強い企画を自由に企画検討会議に提出できることではないでしょうか。もちろんジャンルの偏り、採算面、読者対象、原稿締切、刊行時期など多々検討する必要がありますが、すぐれた企画には企画系・営業系の社員全員が精力的に対応して「より読者に歓迎されるようなアイデア」が提出できるような雰囲気が随所に生まれていることを日々感じております。

一 現在の社員やこれから入社してくる若い人への期待や希望はありますか？

活字離れや電子化の流れは強く感じていますが、やはり書籍の提供は大きな使命と考えております。どうしても企画・編集系の若い人は仕事の性質上著者との接触が多くなるのですが、そこに「読者」という視点を決して忘れないように願っております。読者が本当に求めていることを書籍に反映できるように、著者とともに練り上げていくのだという姿勢は忘れないでほしいと思っています。

また、勤務時間と関係なく TeX を自主的に勉強するなどスキルアップを目指す意欲に満ちた社員が多いことは大変嬉しいことです。もちろん若い人は経験が少ないのは当然のことですから、

同僚や上司の人たちに「わからないことは何でも聞いてみる」という姿勢は持ち続けてほしいですね。

■ テーマ 2 「本について」

一 会社の転機になった本は何でしょうか？

私の父である二代目社長の朝倉邦造が手がけた「日本の衛星写真」(1974 年) かもしれません。米国の NASA まで出かけて各種交渉を経て刊行したのですが、日本列島をカラー画像で余すところなく表現しており、中央構造線や糸魚川・静岡構造線なども一目瞭然と把握できる写真などは読者に大きな衝撃を与えたようで、その年の「毎日出版文化賞」も受賞することができました。また、「内科学」(初版 1977 年) も医学系学生・研修医の定本とまで言われ、今でも版をあらためて刊行が続いております。あるいは、一人の著者で全巻ご執筆いただいた「数学 30 講シリーズ全 10 巻」(1989 年) も大変高評価を得ることができ、今でも多くの読者に迎えられています。これらの本も「読者は何を求めているのだろうか」という小社の出版姿勢の現れだと思っております。今後もこのような流れの中で魅力ある書籍を刊行することが小社の使命であると確信しています。

一本が売れない時代、今後の本への可能性は？

書籍とは膨大な知の集積であると考えております。しかし現代ではその情報を電子化して提供することも時代の流れでしょう。すでに大学によっては授業を紙の書籍でなくパソコン画面を通して行う講義も増加していると耳にしております。流通・社内在庫・迅速性など電子化のメリットは明らかです。刊行した書籍の pdf 化が他社も含めての現状かもしれませんが、今後は紙でなく電子情報のみの提供・販売も視野に入れる必要があります。また、書籍・電子情報市場は日本国内だけでなく全世界にあるとも思われ、英語などでの刊行も視野に入れなくてはなりません。もちろん流通の問題など課題も多く簡単なことではないでしょうが、今後の自然科学書の発展・流布のために試行錯誤も含めて積極的に取り組む必要があります。

■ テーマ 3 「自然科学書協会の今後について」

一 今後取り組みたいこと、期待していることは何でしょうか？

電子化の流れがさらに加速して、既存の流通組織だけでは対応できないことが明らかになってきています。どうしても読者との接点が少ない自然科学書をより多くの読者に示す方法が今まで以上に求められています。全国的に書店数の減少が続いていますが、大型書店への配本だけでなく、図書館への働きかけあるいは Amazon などとの提携・交渉などがさらに必要になることでしょう。また、講演会やマルシェ的フェアなど、潜在的な読者に直接語りかけるような仕掛けを今後ははかる必要があると思っております。我々自然科学書協会もそれらの一助となる活動を目指したいと考えております。

◆ 4. 会員社訪問 社長インタビュー (No.14) ◆

● 社長紹介 ●

おいかわ まさし
及川 雅司

(当協会における現職：監事 (2023 (令和 5) 年～))



● 訪問社情報 ●

【社名】株式会社養賢堂 (Yokendo Ltd. Publishers)

【創立】1914 年 (大正 3 年) 5 月 5 日

【HP】<https://www.yokendo.com/>

【主な出版分野】農学、生物、植物学、科学、電気、電子工学、環境科学、食品・栄養、
情報科学、機械、数学、金属工学、物理学、獣医学、動物学、その他

■ テーマ 1 「株式会社養賢堂について」

— 御社の沿革などをお聞かせください。

当社は、1914 (大正 3) 年に創業者の及川伍三治氏によって設立されました。

及川氏は 1904 (明治 37) 年 3 月 25 日、仙台市立東六番丁尋常高等小学校を卒業すると、4 月 1 日には早くも長兄の順蔵氏に伴われて上京し、この長兄の旧友である野口健吉氏の実兄・吉野兵作氏が経営する出版業・裳華房に、業務見習として入店しました。このとき、及川氏の年齢は 15 才でした。

1914 (大正 3) 年 4 月 30 日、及川氏は裳華房を円満に退き、日本橋区本石町 1 丁目 23 番地に居を構え、多年の構想通り「書肆養賢堂」の看板を掲げました。

当初は自然科学以外の分野の出版をしていましたが、数年後より自然科学の分野に基盤を移し現在に至っています。

— 現在の社員やこれから入社してくる若い人へ期待や希望はありますか？

「温故知新」という言葉があります。自ら逆境を乗り越える力、工夫する力、それを支えるのは過去の礎であると考えております。

自分の力で何かを成し遂げる意思も必要ですが、周囲を巻き込んで仕事をしてほしいと考えております。

過去を知り、それに抗うでもなく、かといって流されるでもなく、自ら考えて道を拓いていける若い人を望んでおります。

■ テーマ 2 「本について」

— 会社の転機となった本は何でしょうか？

まずは、「養賢堂」として及川伍三治氏が手がけた、月刊雑誌「家庭と教育」と単行本「是からの若い女」という二つの処女作があります。

そして、1918（大正 7）年に出版された新刊は、下記の 2 点ですが、ともに各 2 冊物です。「機械設計の基礎」（前・後編）は当時東京高等工業学校教授・杉村伊兵衛氏の著書で、「実用機械学」（上・下巻）は、某機械メーカーの技師長をしていた大石聞二という、やはり東京高等工業学校出の練達のエンジニアでした。そしてその内容程度は、前者は公私立の工業学校の教科書として書かれたもので、前年発行の飯田吉三郎氏著「近世蒸気罐」や秋保安治氏著「工業教育と職工養成」と目的を同じくするものでした。

両書とも高評を得てながく版を重ねましたが、ことに前者は、前後編計 1500 頁の大著で、当時はまだ機械設計学として、これだけ体系的な良書は少なかったため、学生だけでなく技術課の参考書としても重用されたものです。この書はのちに「機械設計学」として前後 2 回も訂正改著され、著者の自費出版でなく養賢堂版として生まれ変わり、太平洋戦争後、1950（昭和 25）年ごろまでも続刊された息の長い工学書の一つとなりました。

こうして自然科学書出版社としての道を歩み始め、おかげさまで今年で 110 年を迎えました。

— 本が売れない時代、今後の本への可能性は？

本が売れないとはいえ、専門書は「難しい」とか「読みづらい」といった印象も強く、まだまだ工夫の余地があるでしょう。手に取ってもらえるデザイン、読みやすい内容や構成の書籍を投入することで可能性を広げていくことができるはずです。

併せて、電子書籍化も進めていくことは必須ではないでしょうか。Kindle や Google ブックス、楽天 Kobo のようなプラットフォームになる必要があるとは考えていません。

あくまでもコンテンツ制作者として、本を出していくことが必要だと考えています。

— 社長にとって本とはどういう存在でしょうか？またお薦めの本や愛読書などがありましたら教えてください。

私にとって、本は頭の中を整理するためのツールの一つです。困ったときは原点に戻る。紙の本は、スマホが変わってもずっと残り続けます。

剣道をやっている私の愛読書は「五輪書」です。なかでも、講談社から発行されている著・鎌田茂雄の一冊は現代語訳や関連文献などもよくまとまっており、大変読みやすくまとめられています。

■ テーマ 3 「過去・未来について」

— 社長になる前にはどのような経験をされてきたのでしょうか？

電機メーカーで研究・開発に従事しておりました。社内でも 3 回ほど異動をしたので、先端半導体のプロセス開発、ノートパソコンの開発、ネットワークセキュリティカメラの技術サポート、ゲーム開発など、様々な経験を積ませていただきました。

自分たちで作ったものが世の中で広く使われる喜びは、書籍づくりとまったく同じであると考えております。

■ テーマ 4 「自然科学書協会の今後について」

— 今後取り組みたいこと、期待していることは何でしょうか？

広く自然科学書協会の会員社を身近に感じていただくことに寄与していくことを期待しております。特に SNS の活用は必須ではないかと考えております。

◆ 5. 東京都印刷工業組合主催研修会 報告 ◆

2024 年 9 月 25 日（水）13 時から 15 時まで、東京都印刷工業組合主催（自然科学書協会・出版粋会 共催）で、ビジョンセンター東京八重洲の会場とオンライン併用のハイブリッド形式の研修会が開催されました。研修会の会場には 3 団体合計で約 30 名が出席し、オンラインでは 3 団体合計で約 100 名の参加がありました。

今回の研修会では、デジタルハリウッド大学大学院特任教授の橋本大也氏をお招きし、「実践！ 出版社、印刷会社に役立つ ChatGPT&Copilot の使い方」と題してご講演いただきました。

研修会に先立ち、東京都印刷工業組合出版メディア協議会の協議会長である日岐浩和氏より挨拶があり、今回の研修会が成功した際には、次回以降も検討したいとのことでした。



日岐浩和協議会長



橋本大也講師

本講演では、実際に ChatGPT などを用いて、分析方法や文章の要約方法そして動画作成方法など、多くの具体的な活用事例をご紹介いただきました。現在の生成 AI は創造的思考の新たなサポート手段であり、使用者自身の能力に依存するので、自分でわかる範囲での活用を講師の方は推奨されていました。

講演後は、会場の出席者やオンラインでの参加者からの質問が多数寄せられ、活発な質疑応答がなされ、無事に研修会が閉幕しました。

（広報委員会：新井 明良）



会場風景

◆ 6. 事務局だより ◆

●理事会

- ・9月19日(木) /文化産業信用組合

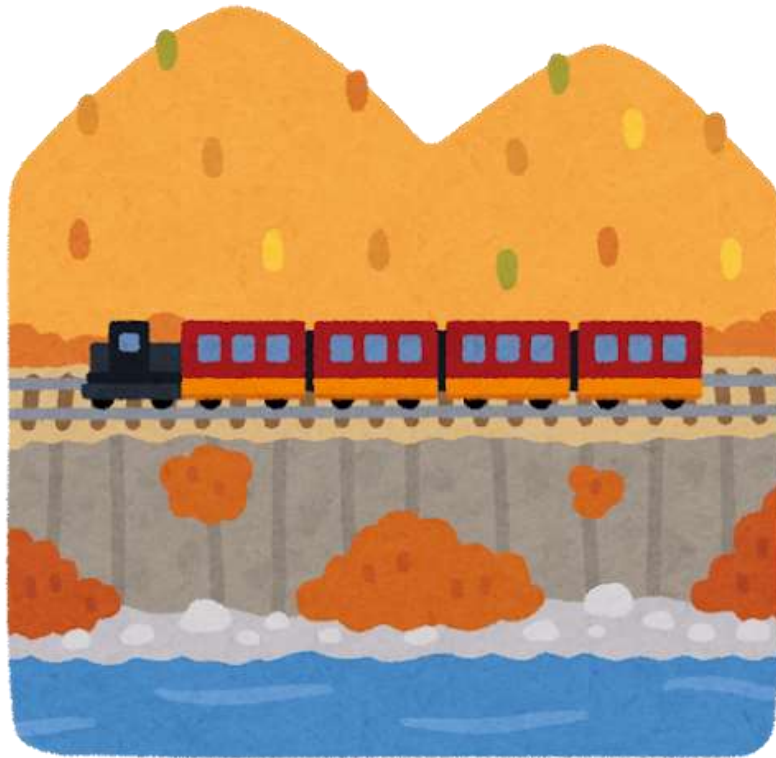
●委員会

- ・9月27日(金) 販売・出展委員会 /文化産業信用組合
- ・10月8日(火) 広報委員会 /ハイブリッド方式(コロナ社会議室・ZOOM)

■年末会員懇親会

- ・12月6日(金) 18時より如水会館にて開催を予定しております。

会員社の代表者、委員会委員の方々ならびに関連団体代表者の皆様にご参集いただき一年の締めくくりと、相互交流を深める一夕にさせていただきたいと思っております。多くの方のご出席をお待ちしております。



◆ 7. 編集後記 ◆

会報をお読みいただきありがとうございます。今号では 2 本掲載されている「会員社訪問 社長インタビュー」ですが、本企画は、自然科学書協会会員社のみなさまに、ぜひ読んでいただきたい企画だと思っています。

記事を読むと、会員社は長い歴史を持つ出版社が多く、様々なことに挑戦しながら、日本の自然科学の分野の発展に貢献してきた書籍を多数刊行してきたことがわかります。

忙しい日々の中でついつい忘れそうになりますが、自然科学書を出版する出版社の一員であることに、使命感を持って仕事をし続けるために、記事を読んで気を引き締めております。会員社のみなさま、是非。過去記事は自然科学書協会 Web ページからどうぞ！

<https://www.nspa.or.jp/bulletins/>

(広報委員会 飯岡 千恵子：丸善出版)

● 第 73・74 期広報委員会 ●

委員長：牛来真也（コロナ社）
副委員長：曾根良介（化学同人）
委員：原 純子（オーム社）
山田貴史（化学同人）
門間順子（共立出版）
加藤義之（建帛社）
高田由紀子（恒星社厚生閣）
新井明良（コロナ社）
逸見健介（南江堂）
飯岡千恵子（丸善出版）

